

第1問 次の各問いに答えよ。

問一 次の日本の文学作品の作者名を漢字で書け。

- ① 歌行灯うたあんどん      ② 野火      ③ 沈黙

問二 次の①～③の四字熟語の空欄に入る適切な漢字を一字書け。(楷書ではつきり大きく書くこと。) また、意味として最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

- ① 暗  飛躍  
② 神出  没  
③ 暴  馮河ひょうが

- ア 思い通りに変化し変わり身が速いこと。  
イ 自由自在に現れたりかくれたりすること。  
ウ 人前をはばからずに思いのままに行動すること。  
エ 血気にはやり無鉄砲な行動をすること。  
オ ひそかに策略を巡らし行動すること。

問三 次の①～③の成句に最も近い意味のものをそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

- ① 療原りょうげんの火
- ② 烏有うゆうに帰す
- ③ 蛇足

- ア 無益なつけたし。
- イ 大変な苦しみ。
- ウ すっかり物がなくなること。
- エ 広がる勢いが激しいさま。
- オ 他人のために危険をおかすこと。
- カ たいして違わないこと。

問四 次の四字熟語の漢字がすべて正しいものの組み合わせを一つ選び、符号で答えよ。

- ア 一触即発・才色兼美
- イ 異句同音・一陽来復
- ウ 短刀直入・大同小異
- エ 優柔不断・有名夢実
- オ 絶体絶命・森羅万象

**第2問** 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、字数制限のあるものは、句読点・符号も一字に数える。

主観的時間と客観的時間の関係は、一つには、「年齢」の問題として現れる。我々は毎年、自分の誕生日を迎えたとき、自分の年齢が一つ増えるのを「経験する」。だが、この「経験」は何の「経験」なのだろうか。そもそも、自分が二十歳になるということは、自分に生じる「出来事」なのだろうか（成人式、法的権利の発生などは派生的なことだから考慮しない）。結局のところ、私の二十歳の誕生日と関係ありそうな出来事とは、その日に、地球が、私の誕生した時の位置から数えて、太陽の周りを二十回公転したという事実のみである。これは、私に生じた出来事ではなく、地球に生じた出来事ではないのだろうか？ とすれば、<sup>①</sup>なぜ地球に生じた出来事が、二十歳「になる」という、私に生じた出来事のように感じられるのだろうか。その後一年間、私は自分の履歴書に、自分の年齢を「二十歳」と記入する。それはちょうど、私の身長や体重が私の属性であるのと同じように、「二十歳」もまた「私の」属性であるときみなされているかのようである。身長や体重は、私自身の体を実際に測定しなければ得られないものであり、事実、測定して得られた結果だからこそ私の属性であるときみされる。もし年齢が、身体を調べてその生理的な「老化」の度合いを数値で示すもの、すなわち、身体の生理的な「若さ」や「老い」、「健全さ」の程度を示す数値であれば、年齢は自分の属性と言える。しかし、「ある年齢になる」ことは明らかにそれとは違い、自分が「ある年齢になる」ことを決めるのは、自分の身体の状態ではまったくなく、天体の運動である。

もつとも、「ある年齢になる」ことは自分の誕生日に自分だけに生じると決まっているわけではない。たとえば、実朝に、「ゆく年の行方を問へば 世の中の 人こそひとつ設くべらなれ」という歌がある。「年の果ての歌」という詞書（ことばがき）があり、一年の終わる大晦日（おおみそか）に詠んだとみられる。歌の意味は、「去っていくその年に向かって、どこに行くのですかと尋ねると、どうやら人の身にとどまって一つ年を取らせるらしい」ということであろう。ここには、個々の人間とは独立に過ぎ去る時間の量が、年の替わりを機に人間に「内在する」<sup>a</sup>キビが見事に描かれている。当時は「満年齢」のように誕生日に一つ年を取るのではなく、新年に皆そろって年を取る「数え年」であった。ある意味では「数え年」の方が、「全員が一緒に」年を取るから、我々の年齢は個体の外部にある天文現象に依存していることが、よりメイリヨウ（メイリョウ）に見て取れる。満年齢だと、誕生日が個人によって違うので、年齢はその人の「属性」であるように思われやすいが、数え年だとその感じが少し異なるかもしれない。いずれにしても、結論的に言うならば、年齢は、誕生日に「一つ」増えるのではなく（それはたんに一年単位でおおまかに表示するという習慣にすぎない）、年齢プラス月、日、時間、秒の総計が正確な年齢であり、Aである。だから、自分の年齢は、刻々と時計の針が動くのにしたがって、それだけの量の年齢が刻々に増えていく。だからもし正確な年齢を聞かれたら、各人が時計を見て、その時の針の位置で「今」の位置を定めることによってしか、答えられない。つまり、自分の年齢の「測定」は、全員に共

通常の時計の「今」の位置よってのみ行われる。これは、自分の誕生の時点からこの「今」に至るまでに経過した時間の量であり、この「量」が「自分に属する」としたら、それは、自分の身体がこの世界に誕生したという「出来事」の「日付」による以外にはない。なぜなら、「今がいつであるか」は **B** だからである。厳密には年齢は一秒毎ごとに新たに増えるのであり、私の年齢は時計の針の進行とともに「自動的に」増えていく。私の年齢は時計の運動に「そのまま従う」。私の年齢を決めるのは、私がいつ生まれたかという事実と、「今」がいつであるかという事実であり、私の誕生日の日付はすでに決まっているから、私のたえず増加する年齢は、「今」がいつであるかによって決まる。

このように、「私の年齢」は、私の個体に固有の運動・変化の何かを示すものではなく、天体の運行に従う「形式的な量」である。しかし、この「形式的な量」に疑問が **ハサ** されることは稀である。我々人間は、すでに長い歴史の過程で、天体の運行を基準運動に取ること慣れており、現在の時計もまたその分身である。その結果、我々は、時計という運動の進行する「量」以外には、ほとんど「時間の量」について考えることができなくなってしまった。たしかに、<sup>②</sup>天体の運行が基準運動として特権的な優位をもつ理由は十分にあるが、しかし、「運動の量」を相互に比較するためには、どちらかを基準運動に取ればよいのだから、基準運動を何に取るかについては、原理的にはある程度の自由がある。つまり、基準運動の取り方によって、そのつどさまざまな「運動の比率」量<sup>①</sup>が可能になり、さまざまな「時間の量」がありうることになる。我々の年齢は、時計の運動によって計られる「形式的な量」ではあるが、同時に、生物としての人間の「加齢」あるいは生理的变化ともまったく無関係ではない。我々自身が、生物という程度自律的な運動体であるならば、この <sup>③</sup>「自律的な運動体自身の運動する「量」というものは考えられないのだろうか。ここで少し議論を迂回させて、「動物の年齢」について調べてみることにしよう。というのも、人間を離れて他の生物になると、形式的な量である年齢が、その生物について教えてくれるものは、人間と同じではないからである。たとえば、カゲロウの成虫は「一日」しか生きないと聞かされるとき、我々は、カゲロウの「人生の長さ」は短いと感ずる。しかし、我々と比べてどのくらい短いのかは、形式的な量としての「一日」という数値からは必ずしもよく読み取れないからである。

我が国の生物学者、本川達雄氏に、『ゾウの時間 ネズミの時間』(中公新書[202])という興味深い著作がある。そこから、今の問題と関連するいくつかの論点を抜き出してみよう。まず最初に、動物の身体に内在的な運動は、動物のサイズに依存しているという事実である。動物にはさまざまなサイズのものが存在するが、サイズの違いは、その動物の運動をも異なったものにする。ネズミは「ちょこまか」動くが、ゾウは「ゆったり」歩く。息をする間隔、心臓の鼓動間隔、腸の蠕動、血液の一巡、タンパク質の合成と破壊など、あらゆる運動と <sup>d</sup>タイシャの一回あたりの時間が異なる。胎児が胎内にいる時間、誕生後おとなに生育するまでの時間、一生の長さもすべて異なる。しかしこれらの時間はすべて動物のサイズと法則的な関係にあり、あらゆる動物を通じて、これらに要する時間は体重の1/4乗に比例する。つ

まり体重が16倍になれば所要時間は2倍になる。心臓の鼓動や呼吸時間が2倍になるということは、2倍だけゆっくりしたテンポになることである。

さらに注目すべきことは、動物の寿命を一回の呼吸時間で割った数値や、一回の心臓の鼓動時間で割った数値は、哺乳類ならば、あらゆる動物を通じて同一になることである。すなわち、いかなる哺乳類も例外なく、5億回呼吸して、20億回心臓が打てば死ぬ。この事實は、動物の寿命、あるいは年齢について、我々の再考を迫る。ネズミは数年、ゾウは百年近い寿命をもつが、この事實をもつてネズミはゾウより「一生を生きる時間が短い」と言えるかどうか。本川氏は次のように考える。「もし心臓の拍動を時計と考えるならば、ゾウもネズミもまったく同じ長さだけ生きて死ぬことになるだろう。小さい動物では、体内で起こるよろずの現象のテンポが速いことから、物理的な寿命が短いといっても、一生を生き切った感覚は、存外ゾウもネズミも変わらないのではないか。……ゾウにはゾウの時間、ネズミにはネズミの時間と、それぞれ体のサイズに応じて違う時間の単位があるのだから、……動物が違くと、時間の流れる速度が違ってくるものらしい」(同書、四〇六頁<sup>ペー</sup>)。「動物には動物のサイズによって変わるそれぞれの時間があり、我々の時計では、他の動物の時間を単純には測れない」(二三四頁)。

以上の本川氏の議論を参考に、人間と動物の年齢について、その観点の比較を試みよう。まず、我々人間はなぜ心臓の鼓動回数で寿命を計らないのだろうか。「人間の」年齢は、天体運動とその分身である時計という基準運動によって数えられる。その理由の一つは、地球の自転による夜と昼の交替は、人間に覚醒と睡眠のリズムを与え、これが「一日」という自然な単位を与えるからである。また、人間は互いの運動を調整して共同作業を行う必要から共通の尺度を必要とする。だから、個々人の心臓の鼓動を基準運動にはしない。しかし時計によって、自分の年齢を表現することは、個体としての自己の運動(心臓、呼吸、老化等々)を固有の基準に取ることを、ホウキして、共通の基準である時間「量」に身を委ねることを意味する。だから、「年を取る速さ」というものは無く、年齢という「量」のみを受け取ることになる。「速さ」とはあくまで二つの運動を比較するところに成立する「比量」であり、一つの基準運動しかないところではその運動の「自己比率」しかないので、時間に「速さ」はなくなり「量」のみが残るからである。とすれば、この場合、人間の各個人の心臓の鼓動は「時間によってその速さを計られる」側に回り、その個人に固有の「時間の流れる速さ」を云々する余地はなくなる。このように、人間の心臓の鼓動の速さが個人差とみなされると同様に、他の動物においても、時計という共通の尺度からみるならば、心臓や呼吸などの生理的活動の「運動の速さ」が違ふとみなされることになる。ところが、そのような見方をしないこともできる。本川氏の視点のように、それぞれの動物種によって心臓や呼吸の「運動の速さ」はみな違ふが、そうした「速さ」ではなく、鼓動や呼吸の「総回数」に着目する見方である。その場合、5億回の呼吸や、20億回の鼓動という「総回数」が一種の基準になっている。そこで重要なことは、心臓や呼吸の運

## 語

## 国

動物自身が基準運動に取られた場合には、その動物種にはその「生きる量」を示す「量」として、鼓動の「総回数」はあるが、基準運動自身には流れる時間の「速さ」はなくなることである。したがって、5億回の呼吸、20億回の心臓の鼓動がすべての動物に「共通」であると言  
う時、この5億や20億という「数」の同一性が「寿命の長さ」の同一性を意味するとすれば、それと引き換えに、それぞれの動物種に流れる時間の「速さ」というものはなくなるのである。

とすれば、<sup>④</sup>ネズミはゾウに比べて「時間が速く流れる」という言い方には、人間の用いる時計をもとにした視点と、動物の心臓や呼吸を基準運動にした視点との、<sup>⑤</sup>二重の視点が併用されていることが分かる。

植村 恒一郎 著 「時間の本性」勁草書房、二〇〇二年、二〇五ページ～二二一ページ

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字に改めよ。(楷書ではつきり大きく書くこと。)

問二 傍線部①「なぜ地球に生じた出来事が、二十歳』になる』という、私に生じた出来事のように感じられるのだろうか」とあるが、筆者はその理由を「誕生日」のどのような性質にあると考えているか。簡潔に説明せよ。

問三 空欄 A の部分に元々あった表現とほぼ同意の表現を、本文中から三十字以内で抜き出せ。

問四 空欄 B に入る表現として、最も適当なものを次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア この世界に私が誕生した日付によって決まること
- イ 常に動いていて固定してとらえることができないこと
- ウ 私だけではなく、生きている全員に共通なこと
- エ 各々の「私」によって意味合いを変えていくこと
- オ 時計と私のとらえ方とでは大きく異なること

問五 傍線部②「天体の運行が基準運動として特権的な優位をもつ理由は十分にある」とあるが、それはどのような理由か。「……という理由。」に続くように五十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部③「自律的な運動体自身の運動する『量』」とあるが、

(Ⅰ) それはどのようなものか。三十字程度で具体的に説明せよ。

(Ⅱ) 傍線部③と対比的に用いられている表現を、同じ段落の中から、二十字で抜き出せ。

問七 傍線部④「ネズミはゾウに比べて『時間が速く流れる』という言い方」には「二重の視点が併用されている」(傍線部⑤)とあるが、

(Ⅰ) 「動物の心臓や呼吸を基準運動にした視点」だけが用いられているとは言えないのはなぜか。四十字以内で説明せよ。

(Ⅱ) 「人間の用いる時計をもとにした視点」だけが用いられているとは言えないのはなぜか。四十字以内で説明せよ。

問八 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア 動物には様々なサイズの違いが存在するが、それは運動や時間と相関関係にあり、そのことが動物の「ちよこまか」や「ゆっくり」というテンポを醸しだしている。
- イ 時間の問題を考える際に、動物の年齢を考慮することが有効なのは、人間と比べて非常に短い人生を送る動物もおり、そのことで人間が自己を相対化する契機となるからである。
- ウ 数え年は、我々の年齢が、個々の人間とは独立に過ぎ去る時間なのだということを示しているが、満年齢は自分の誕生日に自分だけに生じるものなので、自分に属する時間となる。
- エ 人間は天体の運行に基づく時間を自明のものとしているが、生物を自律的な運動体と捉える立場を取ると、時間把握の仕方や時間の特性について新たな視点を獲得することができる。
- オ 人間も動物も、その物理的な年齢は違ってても、感覚的には同じ長さの人生を送っているものであり、そのような内在的な時間の流れこそ、客観的時間としてとらえていかねばならない。



**第3問** 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、字数制限のあるものは、句読点・符号も一字に数える。

わたしはここまで、いわゆる「哲学」について、ある一つの視点から <sup>a</sup> かいつまんで紹介してきました。まず、「超自然的原理」(伝統的な用語でなら「形而上学的原理」)を立て、それを媒介にして自然を見、自然と関わるような思考様式(つまり(注1)「形而上学」)、これこそが「哲学」と呼ばれてきた知の本質であるということ、その「哲学」の原点になる「超自然的原理」が、<sup>a</sup> テッテイして自然のなかでものを考えるわれわれ日本人にとっては理解不可能なものであること、こういったところから、「哲学」はわれわれ日本人にとって <sup>b</sup> エンドオイものだったのだと思います。

しかし、西洋でも(注2)ニーチェという思想家が登場してきたところで様相が一変します。わたしは、<sup>①</sup> ニーチェ以前と以後を、同じ哲学史に一線に並べるのは、おかしいと思っています。ニーチェの目指したことは、これまで哲学と呼ばれてきたものをすべて批判して乗り越えようということです。その仕事を同じ「哲学」という名前で呼ぶと、ひどく <sup>b</sup> 紛らわしいことになります。

<sup>②</sup> 同じような発想をした人に、(注3)マルクスがいます。マルクスは、<sup>c</sup> 自分の仕事は経済学ではなく、経済学批判だ<sup>d</sup>と言います。経済学を生み出したのは、「生産と交換のブルジョワの様式」つまり資本制的な経済構造です。ですから、経済学を批判することによって、それを生み出した経済構造を相対化することができ、それを乗り越える視点が獲得できると考えた。むしろマルクスの頭にあったのはイギリスの(注4)古典経済学ですが、(注5)エンゲルスがそんなふう to 解説しています。

ニーチェが <sup>c</sup> クワダてたのも、マルクスと同じような意味での「哲学批判」なのです。哲学を批判することによって、それと一体となって展開されてきた西洋の文化形成を相対化し、批判する。もつとも、彼は「哲学批判」とは言いません。われわれが「哲学」というところを、彼は(注6)プラトニズムと言います。しかし、彼がやろうとしているのはプラトン以降の哲学全般の批判であり、これまでの哲学を継承していくつもりはなかったことは間違いありません。

彼の主張を一言にまとめれば、「プラトニズムの逆転」ということになります。プラトン以降のいわゆる西洋哲学・道徳・宗教はすべてプラトニズムであり、それをいかに <sup>d</sup> コクフクするかが彼の課題だったのです。つまり、アンチプラトニズム。「プラトニズム」<sup>e</sup>と考えれば、ここに「アンチフィロソフィ」<sup>e</sup>「反哲学」という概念が誕生したことになります。

ですから、ニーチェ以前と以後を、一本の線上に並べて <sup>A</sup> に考えようとすれば、なにがなんだかわからなくなるのは、むしろ当然なのです。そして、ニーチェ以後の二十世紀の哲学は、望むと望まないと、「反哲学」という視点を無視することができなくなりました。もつとも、ニーチェだけがひとり西洋の文化形成、<sup>e</sup> コトに近代ヨーロッパ文化への「反」<sup>e</sup>の立場に立ったわけではありません。同

じころに、たとえば物理学の領域でも、エルンスト・マッハ（一八三八―一九一六）が、（注7）ニュートンの登場以来体系化され、十九世紀半ばにヘルムホルツ（一八二一―一九四）によって誰でもが利用できるようにマニュアル化された古典力学を批判して乗り越えようとする動きをしています。このマッハとニーチェの考え方は、とても似ているのです。

どのような点が似ているのでしょうか。ひどく表面的に見れば、二人ともダーウィニズムから決定的な影響を受けた、というところだと言えそうです。特にマッハは、ドイツ語圏に初めてダーウィン（一八〇九―一八八二）の進化論を紹介したヘッケル（一八三四―一九一九）と親交を結んでいた時期があり、かなり早くから進化論を自分の方法的な仮説として採用していました。

ダーウィニズムといっても、自然淘汰説や環境決定論のような、ダーウィンの進化論を支えている仮説はあまり問題になりません。特にニーチェは、その二つの仮説についてははつきりとアンチ・ダーウィンの立場をとっています。ただ、生命が環境へ適応するために進化するのならば、人間の認識も環境へ適応するための生物学的機能にすぎません。そうなれば、すべての認識は相対的で、**B**な真理やそれをとらえる知識や認識などというものはありえないという考え方になります。ニュートン物理学が前提としている絶対時間と絶対空間、そしてその内部での質点の運動といった考え方は認められないことになります。

一八八〇年代にヘッケルが紹介したダーウィニズムは、彼の手によってかなり歪められたものでした。たとえば、「個体発生は系統発生を繰り返す」といった、進化は環境への適応によって起こるのではなく、一つひとつの生物体の上で繰り返す起こるという自分の仮説を持ちこんで紹介したりしています。『ゲーテ、ラマルク、ダーウィンの自然観』（一八八二）というその書名からも推測できるように、ヘッケルの紹介したダーウィニズムは、ゲーテの自然哲学や、獲得形質の遺伝を認めるラマルク（一七四四―一八二九）の進化論にかなり引き寄せられたものでした。

とはいえ、ヘッケルの紹介した進化論はドイツにおいて、哲学における「超自然的原理」、物理学における「絶対時空間」といった**C**な前提を、ありえない仮説として却ける大きなきっかけにはなりました。実際、ホフマンスタール（一八七四―一九二九）やロベルト・ムジール（一八八〇―一九四二）などの世紀末ウィーンの若い詩人たちは、マッハとニーチェを<sup>③</sup>当時の最先端の現代思想<sup>モデルネ</sup>として結びつけて見ていました。一方は物理学者で一方は古典文献学者。領域はまったく違うのですが、その相対主義的な物の考え方が似ていると、同時代の詩人たちの眼には見えたのでしょうか。現在から振り返って見ても、この詩人たちの直観は正しかったと思われれます。

ニュートン力学が、誰でも手軽に使えるようなかたちでマニュアル化されて普及したのは意外に後になってからのことで、十九世紀も半ばになってからです。それ以前は、知識人はともかく、普通に生活している民衆には、世界に神の摂理のほかの因果関係があるということを学ぶ機会はあまりありませんでした。

十九世紀半ばになると、ニュートン力学を中軸とする科学的な自然観や世界観が普及し、空間はすべて等質的な点の集合である、とか、宇宙はすべて統一的な等質的時間に支配されている、というような時間観念や世界観が一般市民のあいだにも広がってきました。

折しも一八五一年にはロンドンで第一万国博覧会が開催されて、鉄骨とガラスだけでつくられた広大な水晶宮<sup>クリスタル・パレス</sup>を舞台に産業革命のスイを集めた技術の成果が展示され、観衆を圧倒します。これが自然科学的世界観の普及をうながしたことは言うまでもありません。

(注8) ドストエフスキー(一八二一—八二)などは、万博会場となった水晶宮の噂<sup>うわさ</sup>を聞き、そこに科学と技術がすべてを決定する未来社会の姿を見て、危機感をいだきます。『地下生活者の手記』(中村融訳、角川文庫)の、「不可能とは——つまり(注9)石の壁のことである。石の壁だつて? そうさ、もちろん、自然の法則、自然科学の結論、数学といったたぐいのものことである。／実はもともと人間に意志だとか気まぐれとかいうものではなく、今までにもかつてあったためしがないのだから、そうなれば<sup>④</sup>人間自体はピアノの鍵盤やオルガンの釘<sup>くぎ</sup>みたいなものにすぎなくなってしまう」という一節は、当時の気分を端的に表したものでしょう。

<sup>⑤</sup> 芸術は暗い物陰で長い発酵の期間を終えて初めて花開くようなものだとするならば、科学に照らし出されてすべてが素通しになり、そうした物陰がまったくなくなってしまうた明るい世界には、新しい芸術作品などの芽生えてくる余地がない。こうした予感<sup>⑥</sup>は、(注10)ボードレール(一八二一—六七)の『悪の華』など、いわゆる世紀末芸術に共通する認識でした。真昼の太陽がすべてのものを照らし出すような明るい技術社会、技術文明が花開くだろうけれども、それは芸術にとっては大変な危機です。ニーチェも同じ危機感を共有していました。

当時、電灯はまだ普及していませんでしたが、ガス灯は普及してきて、日常生活のなかでも真の暗闇が次第に失われていく時代でした。等質的な今の継起という物理学的时间概念に反撥<sup>はんぱつ</sup>して、作家たちによって異常な時間体験<sup>⑦</sup>がしきりに語られるようになるのも、このころです。ヘルムホルツ一派などは、生命をはじめとするすべての自然現象を、物理、化学の力によって説明してみせる、という力学万能の立場を主張していました。

ニーチェとマッハは、このような科学的な世界観への危機感から出発し、その思想を形成した人たちです。これは、十九世紀末の芸術家たちが感じ表現した危機感と、共通するものでした。

木田 元 著 「反哲学入門」新潮社、二〇一〇年、二〇四ページ～二一〇ページ

- (注1) 形而上学——現象を乗り越えてその背後にある本質・存在の根本原理を思惟<sup>し</sup>あるいは直観<sup>い</sup>によって研究しようとする学問。
- (注2) ニーチェ——ドイツの哲学者（一八四四～一九〇〇）。
- (注3) マルクス——ドイツの経済学者・哲学者（一八一八～一八八三）。
- (注4) 古典経済学——アダム・スミス（一七二三～一七九〇）を祖とするイギリスの経済学派。
- (注5) エンゲルス——ドイツの思想家・革命家（一八二〇～一八九五）。
- (注6) プラトニズム——ギリシャの哲学者・プラトン（前四二七～前三四七）の哲学に由来する哲学体系。
- (注7) ニュートン——イギリスの物理学者・天文学者・哲学者（一六四二～一七二七）。
- (注8) ドストエフスキー——ロシアの作家。
- (注9) 石の壁——石の壁で囲まれた牢獄<sup>ろうごく</sup>。
- (注10) ボードレール——フランスの詩人・評論家。

問一 二重傍線部 a～f のカタカナを漢字に改めよ。(楷書ではつきり大きく書くこと。)

問二 波線部 ①・② の言葉の意味として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

ア すじみちを立てて

イ わかりやすく

① かいつまんで 要約して

エ ほどほどに

オ 誤解のないように

ア めまぐるしい

イ 見分けがつきにくい

② 紛らわしい

ウ やっかいな

エ 見苦しい

オ わずらわしい

問三 空欄 A 〽 C に入る表現として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

- ア 絶対的    イ 連続的    ウ 数学的    エ 概念的    オ 総合的    カ 基本的    キ 初歩的

問四 傍線部①「ニーチェ以前と以後を、同じ哲学史に一線に並べるのは、おかしい」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。その

理由の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア ニーチェはダーウインから決定的な影響を受けたにもかかわらず、自然淘汰説や環境決定論のような仮説をあまり問題にせず、ダーウイニズム以前の世界観に戻ろうとしたから。

イ ニーチェは西洋の文化を反哲学の視点で批判したにもかかわらず、多くの知識人がそのことを批判し、西洋文化をそのまま受け入れ継承しようとしたから。

ウ ニーチェの主張は一言にまとめれば「プラトニズムの逆転」ということになるが、プラトン以降の西洋文化形成のあり方までを否定したわけではない。

エ ニーチェが知の本質とされた形而上学を否定し、プラトン以降の哲学全般を批判したことによって、世紀末の民衆は哲学を受け入れず拒否するようになったから。

オ 西洋哲学はプラトンに始まる形而上学によって体系づけられていたが、ニーチェ以降はアンチフィロソフィ＝反哲学という概念が形成されていったから。

問五 傍線部②「同じような発想をした人に、マルクスがいます」とあるが、マルクスとニーチェはどのような点で「同じような発想」をしたのか。五十字以内で説明せよ。

問六 傍線部③「当時の最先端の現代思想」とあるが、それはどのようなものだと「世紀末ウィーンの若い詩人たち」は考えていたのか。六十字以内でわかりやすく説明せよ。

問七 傍線部④「人間自体はピアノの鍵盤やオルガンの釘みたいなもの」とあるが、ここでは人間はどのようにとらえられているか。その

説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア ピアノやオルガンの音色のように汚れない美しい存在。
- イ 組織の規律に従い思いつきや気まぐれなどを排する存在。
- ウ 束縛を逃れ、自分の規範に従って行動する自律的な存在。
- エ 人間味を感じさせない神のような意志をもつ不屈の存在。
- オ 自然の構成要素としてその法則に従って動くだけの存在。

問八 傍線部⑤「芸術は暗い物陰で長い発酵の期間を終えて初めて花開くようなものだ」とあるが、それはどういうことか。八十字以内でわかりやすく説明せよ。

問九 次の学生たちの会話のなかで本文の内容と合致しないものを二つ選び、符号で答えよ。

ア (学生A) ニーチェにとつては、近代ヨーロッパ文化への「反<sup>アンチ</sup>」の立場から、プラトン以降の西洋哲学・道徳・宗教をいかに乗り越えるかが課題だった。

イ (学生B) その立場から、反ダーウィニズムの立場に立ち、ニュートン物理学も否定した。

ウ (学生C) それにしても、ヘッケルによって伝えられた進化論が、ドイツで、あり得ない仮説として「超自然的原理」などを却ける契機になったのは時代の流れだろうね。

エ (学生D) 世紀末ウィーンの若い詩人たちも、学問領域が異なるにもかかわらずマッハとニーチェの考え方に似た点を見出<sup>みいだ</sup>していたようだ。

オ (学生B) 知識人はともかく、十九世紀も半ばになって当時の民衆は、ニュートン力学によってはじめて神の摂理以外の因果関係があるということを知った。

カ (学生D) それでも民衆はドストエフスキーの考え方に感化され、ニュートンの自然観に疑問をもったというのが歴史の真実だということらしい。

キ (学生A) そのドストエフスキーが自然科学だけに偏った世界観に強い疑問を抱いたことは、『地下生活者の手記』を読めば明らかだ。